

第131回簿記検定試験 1級 出題の意図・講評

〔商業簿記〕

（出題の意図）

今回は、久しぶりに連結財務諸表を取り上げました。

おまけに、よく出題される債権・債務の相殺、内部利益の除去、子会社による配当金の処理、子会社株式の売却に関する処理、さらに海外子会社の為替換算と、内容が盛り沢山でした。これを一つの子会社にまとめてしまうと、非常に複雑になるため、子会社を3社作り、それぞれの処理について問う問題としました。子会社が3社もあって大変だと思われる方もおられるとは思いますが、1社でこの内容を盛り込むよりもはるかに簡単な問題であるということを、理解していただきたいです。

さらに、連結財務諸表作成時に作成される包括利益計算書から、その他の包括利益の金額を問3において出題しました。この問題では、包括利益の金額や純利益の金額を問われた場合には難しいですが、その他の包括利益については、その構成要素を理解していれば、他の箇所間違っていたとしても、比較的容易に計算することができます。その他の包括利益の計算式を覚えていて、まず包括利益を計算し、そこから純利益を引くのではなく、包括利益を構成する要素を集めて計算すれば、それほど難しくはないでしょう。

これまでも、連結財務諸表が出題されると、もうその回の試験の合格を諦めてしまう受験生が見られましたが、何とか問題に食いついて解答していただきたいです。

（講評）

採点結果は、予想したとおり、あまり芳しくなかったです。受験生は、はじめから連結財務諸表が出題された場合には、その回は、諦めるという気持ちを持っていると見受けられました。しかし、連結財務諸表は、主たる財務諸表として位置づけられており、個別財務諸表は従たる財務諸表として取り扱われております。日商簿記1級は、中小企業だけを対象としているのではなく、大企業も含めて、その簿記処理を問う試験です。連結財務諸表について、きちんと対応できるように学習していただきたいです。

さらに、一番できていなかったのが、その他の包括利益の金額です。これは、連結財務諸表における問題ではありますが、その他の包括利益は、親会社単独でしか出てこないため、連結財務諸表を離れて計算できる問題です。包括利益

と純利益との違い、その他の包括利益を構成するものは何かについて、きちんと理解しておく必要があるでしょう。

最後に、海外子会社の為替換算に用いられるレートをきちんと把握しておく必要があります。そして、その時に算出される差額の処理を理解しておく必要もあります。その際、海外支店の為替換算との違いを認識しておけば、申し分ないでしょう。

いずれにしても、連結財務諸表は、いくつかの個別財務諸表を合算して作成されるものであるため、理解してしまえば、各計算は、それほど難しくはないです。諦めずに、こつこつとやってみることが肝要です。

[会計学]

(出題の意図)

問 1

各文章の中に最も適切な用語を記入させる問題です。この出題形式は、しばしば出されているものですが、会計学分野における基本的な概念や専門用語を、しっかりと認識し、正確に記述できるかどうかを問うています。

問 2

新株予約権付社債（転換社債型）を発行した場合の、発行者側の会計処理に関する問題です。新株予約権付社債に関する会計処理の方式には、「区分法」あるいは「一括法」の選択適用が認められています。設問は、それぞれの方式を適用した場合、どのような会計処理となるかを、比較対照しながら考えさせる形式にしてあります。

問 3

企業が株式交換により他社を子会社化する場合に関連する会計処理、すなわち、企業結合会計基準についての問題です。設問は、この企業結合取引について、会計処理のステップを段階的に追いながら考えさせる出題形式としています。すなわち、この問題は、被合併会社の企業評価額を算定し、株式交換比率を求め、新株発行に伴う資本の増加額を計算させ、さらに「のれん」の計上額を求めさせています。

(講評)

問 1

基本的な会計学上の用語であるから、正確に漢字で記入することが望まれます。漢字が正確でなかったり、ひらがなで記入してある答案も散見されました。

問 2

「区分法」と「一括法」の違いの背景にどのような考え方の相違点があるのかを、しっかりと認識しておくことが大切です。その違いを理解している受験者には、比較的素直な問題であったと思います。しかし、そうでない場合には、解答に戸惑いがみられました。その結果、本来、極めて簡単な「一括法」による金額の計算にも、誤りが生じている答案がかなりありました。

問3

この設問は、企業結合の会計処理を、その手順に従って段階的に計算していくことが必要です。この問題も、企業結合会計の仕組みを的確に理解しているかどうかで、答案の出来に大きな差が生じていました。

【工業簿記】

(出題の意図)

本問題は、実際組別総合原価計算の問題ですが、総合原価計算の問題としてよく問題になる完成品総合原価と月末仕掛品原価への配分は本問題の論点ではありません。月末の工程内仕掛品はなく、月末仕掛品はケース加工部門におけるケースAの月末在庫のみです。

本問題の最大の論点は、直接材料の組別の実際消費量をどのようにして把握するかという点です。この論点は、実務上は非常に重要な点ですが、把握方法は1通りではないため試験には出しにくい点です。ケース・バイ・ケースで適切な把握方法も変わりますが、今回は把握の方法を直接指示する形で様々な把握方法を取り上げました。

やみくもに計算を始めるのではなく、与えられた資料から生産、消費の実態を正確に読み取り、全体像を把握する訓練をすることが重要です。例えば、月末仕掛品がケースAのみであること、作業時間の誤報告が影響する範囲などは、資料をながめて、すぐにわからなければなりません。

(講評)

問1と問2の借方は比較的よく出来ていました。問4、問5、問6は、他の問と独立しており、それほど難しい問題でもなかったのが高い正答率を期待していましたが、実際には芳しくなかったです。とくに、問5と問6がそうでした。問6は最初からあきらめてしまった人が多かったように思われます。

【原価計算】

(出題の意図)

原価計算は、直接原価計算方式の損益計算書を採用している企業の予算管理、

とくに予算統制に焦点を当てて出題しました。基本的な概念とその計算法、オーソドックスな差異分析の概念とその計算法などについての理解度を問う基本的な問題であり、業績検討会議における、社長、製造部長、営業部長の会話から解答を考えさせるタイプの問題でした。原価計算とは、企業の経営管理者にたいして、その経営管理に不可欠な経済的情報を提供するため、適切な数量的データを認識し、測定し、記録し、分類し、要約し、解説する理論と技術です。計算ができて、それを経営管理のために使いこなす能力まで身に着けなければ意味がありません。原価計算の概念と計算法などの基本をしっかりと理解したうえで、文脈を読み取る能力を養う努力を日ごろから続けてください。

(講評)

今回は高得点の答案が相当数ありました。その一方でまったく解答できない答案もみられました。非常に簡単な箇所でのケアレスミスも目立ちました。答案は必ず見直すよう注意してください。